

小羊のクリスマス

作：岡崎ルツ子

演出：小川政弘

登場人物

斎藤タクロウ	24 歳。ケーキ職人の修行中。
柏木真紀子	24 歳。幼稚園の先生でクリスチャン。
高橋洋一	40 歳。「モン・ペール」のチーフ。
佐々木ケン	21 歳。タクロウの後輩。
渡辺シンジ	24 歳。タクロウと同期。
木下ユミ	20 歳。「モン・ペール」の職人
加藤リカ	22 歳。「モン・ペール」の店員
小山ミキ	19 歳。「モン・ペール」の店員
前島忠雄	45 歳。教会の牧師。

< 前編 >

モンペール工場内

ケン	「チーフ、アラザンはもっと散らすんですか？」
高橋	「おい、やりすぎだよ。もっと上品に。そう、タクロウの見てみる。」
ケン	「先輩、いいっすね。」
ユミ	「タクロウのケーキはオーソドックスだけど、なんかいい味だしてるわよね。」
タクロウ	「そうかな。」
シンジ	「やだね、こいつ謙遜しちゃって。チーフに一目置かれてるからってさ。」
高橋	「しゃべるのは、仕事が終わってからにしろ。手が止まってるぞ。」
シンジ	「ふあーい。」

N 俺は斎藤タクロウ。一流のケーキ職人になりたくて青森から上京して5年。洋菓子専門学校を卒業して、東京でも指折りの老舗のケーキ屋「モン・ペール」に就職することができた。夢はフランスに修行して自分の店を持つこと、だったのだが…。いつも一緒に帰る、後輩のケンも思いは同じだった。その日も -

タクロウ、ユミ、ケンの帰り道

- ケン 「あーあ。いつになったら俺の焼いたケーキ、ウィンドウに置かせてもらえるのかなあ。」
- ユミ 「まだ3年位で何言ってんの。」
- ケン 「だってさ、毎日、毎日下ごしらえばかり。たまにやらしてもらえてるのっていえば、チョコのコーティングばっかでき、あんな小学生だってできますよ。」
- ユミ 「その基本が大事なんじゃない。」
- ケン 「わかってますよ、だけどね、うちの店には鬼より怖い高橋チーフ以下、ずらーと30代からの職人がいてさ、いつになったら自分のアレンジしたケーキが焼けるようになるのかさ、気が遠くなりますよ。でしょ、タクロウ先輩。」
- タクロウ 「しょうがないさ、うちはそこらの店と違うんだから。」
- ケン 「はー、なんだか故郷に帰りたくなっちゃったなあ。」
- ユミ 「もうすぐクリスマスでしょ、忙しくて余計なこと考えてるひまなくなるよ。」
- ケン 「それ、それがまたやなんだなあ。ケーキ作りに追われて、彼女なしで今年も終わるってのが、さいこーにいやなの。わかります？」
- タクロウ 「仕事だろ。文句言うな。あ、俺こっちだから。」
- ケン 「あれッ、先輩のアパート方向違いますよ。」
- タクロウ 「ちょっとね、野暮用。んじゃ、お疲れ様。」
- ユミ、ケン 「お疲れ様でしたあ。」「お疲れ様っした。」

- N 後輩のケンの不満は、そのまま俺の気持ちだった。初めの頃と違い、技術に目立った進歩がない。あせりも出てくる。このまま店で働けばいいのか、中途半端でもいっそ田舎に帰ってしまおうか、かといって自力でパリに行く決断もできないまま日々が過ぎていくのだった。そんな俺にも、心ひそかに憧れる女性がいた。

幼稚園の園庭

牧子、子供たち「(讃美歌) 飼い主わが主よ迷うわれらを / 若草の野辺に導きたまえ...」

- N (歌にかぶせて) あれは、そうふた月ほど前だったろうか、店の近くのキリスト教の幼稚園のそばを通りかかったとき、底抜けに明るい歌声が聞えた。見るとショートカットの小柄な彼女。それが柏木牧子だった。

モノ 「あれ、ひょっとして音、外れてる...？」
牧子 「(讚美歌) 我らを守りてやしないたまえ...」
モノ 「音痴の先生さんてのも、おもしろいな。」

N そんな元気いっぱい彼女の彼女が、そのときの俺にはまぶしく見えた。それから俺は彼女の明るい笑顔に会いたくて、仕事の行き帰り、休みの日など、幼稚園のそばを用もなく散歩したりしていた。我ながらおかしいが、彼女を見かけるとその日一日は何となく幸せな気分になれるのだった。それが行き詰りを感じている今の俺のたったひとつの楽しみなのだ。

N そんなある日 -

路上

タク、牧子 「あてっ」「いたっ」
牧子 「あ、ごめんなさい。私ったら、ぼんやりで、ほんとごめんなさい。」
タクロウ 「い、いや、お、俺の方こそ...。」

N 心臓の音が彼女に聞えるかと思った。密かに会いたいと思って回り道していた当の彼女に、曲がり角でぶつかってしまったのだ。

牧子 「あら、あの失礼ですけど、モン・ペールの？」
タクロウ 「あ、ええ・・・知ってるんですか、俺のこと。」
牧子 「やっぱり(笑)。よく見かけるので。私、甘いもの大好きで、モンペールのケーキの大ファンなんです。」
タクロウ 「そ、そりゃ、どーも。」

N それが、憧れの柏木牧子と言葉を交わした最初だった。

ケーキ工場、作業中。

ユミ 「それから？」
タクロウ 「それからって、何度か彼女にあって、話するようになって。」
ユミ 「初めて彼女に誘われたデートの場所が教会だったと、そういうことね。」
タクロウ 「そう。」

ユミ 「ということは、少なくとも彼女に嫌われてはいないわけだ。」
シンジ 「でも好かれてるってわけでもないんじゃない。」
タクロウ 「(むっとして) あ、なんだよ。シンジ聞いてたのか？」
シンジ 「わりいわりい、お前がやけに深刻な顔してるから、気になってさ。何、そんで彼女どんなタイプ？やっぱあれ、松嶋奈々子？それとも...」
高橋 「シンジ、何度言ったらわかるんだ。仕事中は無駄話するな。」
シンジ 「どーも、すみません。(小声で) けっ、いばりやがって。」
ユカ 「しっ、聞えるわよ。」

N シンジは俺と同期入社。おしゃれで、仕事も要領良くこなすやつだ。だが彼女に不自由したことの無いシンジに、どんくさい俺みたいな者の気持ちはわかってもらえないと思った。

教会堂。オルガンで会衆賛美。

会衆 「(讃美歌) 飼い主わが主よ、迷う我らを若草の野辺に導きたまえ。」

N こうしておれは、牧子さんに誘われて、生まれて初めて教会に行った。おれのイメージとは違って、その教会は、ステンドグラスも何もない、民家に毛のはえたような家だった。それでも俺は牧子さんの隣に座れたのがうれしく、夢見ごちだった。讃美歌の後、牧師さんが話をした。

牧師 「(聖書) ...イエスは舟から上がられると、多くの群集をご覧になった。そして彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみ、いろいろと教え始められた...」。羊は大変に弱い動物です。狼などと戦う武器を持っていません。目も弱く導き手がいないと、誤った方向に群れをなして進んで行ったりします。迷い出て崖から落ちたり、飢え死にしたりすることもあります。イエス・キリストは、自分の話を聞くために集まった多くの人々をまるで「羊飼いのいない羊のよう」に思われたのです。正しい道を知らずさまよっている弱い羊、それは現在の私たち人間の姿でもあるのです。」

モノ 「弱い羊が、人間の姿か...。そんな風には考えたこともなかったけど...かもな...。」

牧師 「まもなくクリスマスですが、クリスマスはイエス・キリストのお誕生をお祝いする時です。私たち迷える羊のために、神であるイエス様は人としてこ

の地上にお下りになられた。道に迷う私たちを深くあわれまれ、正しい道を教え導いて下さる為にいらしたのです...。」

N 集会が終わった後、おれは駅まで牧子さんと一緒に帰った。

渋谷駅構内。人々で混雑している。

牧子 「どうでした？教会。」

タクロウ 「ん、まあ、いい話が聞けたなと...。」

牧子 「ぜひまたいらしてくださいね。クリスマスにはお祝い会があるんです。」

タクロウ 「あ、そ、それはちょっと、無理かな。」

牧子 「やだ、そーですよ、ケーキ屋さんですもの、クリスマスが一番忙しいですよ。あ、じゃあ26日の日曜日、来られます？」

タクロウ 「そのころは、いい、かな？わかんないけど。」

牧子 「お待ちしていますね。それじゃあ。」

- S E (電車到着。ドアが開き人々どっと降りて来る。)

アナウンス 「終点渋谷です。どなた様もお忘れ物なさいませんように...。」

- ヤンキー、タクロウの肩にぶつかる。

ヤンキー 「ちょっ、気をつけろい。」

タクロウ 「あ、す、すいません。」

N 牧子さんの丸くカットした可愛らしい頭は、たちまち人の波に吞まれて消えてしまった...。

モノ 「人、人、人。このなんだかやたら忙しい人たちも、みんな迷える羊なのかな。」

N クリスマスも間近いある夜、おれたち職場の仲間は一足早い飲み会をやった。

店の近所の大衆的なレストラン。

S E (クリスマスソング。混んでいる。ユキ、シンジ、タクロウ、ケン、ビールを飲んだり料理をつまんだり。)

ケン 「あーあ、仕事の帰りゆっくり呑めるのも、しばらくお預けかあ。」

ユミ 「クリスマスケーキの予約、今年どのくらい？」

タクロウ 「去年より多いらしい。」
ケン 「うそでしょー、また徹夜、徹夜すかあ？勘弁してよー。」
ユミ 「はー、やだなあ、大きな店って。ね、シンジ。」
シンジ 「悪いけど、俺、いち抜けるから。」
ケン 「は？」
ユミ 「え、何、どういう意味？」
シンジ 「(いったん呑みこみ)まだ、言ってなかったけど、俺、店やめるの。」
皆 「うそー。」「なんでー。」「ええっ。」
シンジ 「横浜のスターホテルってあるだろ？そこでフランス料理の店オープンするんだ。俺にデザート部門任せるって話に来てさ....。」
ケン 「スターホテル??？」

N 俺と同期のシンジが三ツ星レストランのチーフに。俺は嫉妬でこめかみがどくんどくと脈打つのを感じた....。

<後編>

N 俺は齋藤タクロウ。故郷の青森から出てきて、一流のケーキ職人になるため老舗の「モン・パール」で働いている。すでに5年になるというのに、相変わらず下働きのまま、思うようにケーキを焼くこともできない。そんな行き詰まりを感じていた矢先、クリスマスも間近いある夜の飲み会で、同期のシンジが店をやめると言い出した。横浜の三ツ星ホテルのデザート部門のチーフに引き抜かれたという。俺はシンジに対する嫉妬で、こめかみがずきずきと脈打つのを感じた。

レストラン内

ケン 「スターホテル？シンジさん、あのレストランのチーフに？」
シンジ 「ま、お前らには悪いけど、俺もこのままじゃいらんないしさ、引抜かれんのもチャンスかなってさ。」
タクロウ 「....。」
ユミ 「信じらんない....。」
シンジ 「いちお、チーフだろ、給料はまあ3倍は固いね。あ、タクロウ、お前さえよけりゃ、オーナーに紹介してやってもいいよ。」
タクロウ 「いいよ、別に。」
シンジ 「あんな古臭いところで、安い給料でやってることないって、な。」

タクロウ 「たいした腕でもないのに、偉そうに。」
シンジ 「なんだあ？も一度言ってみろ。」
タクロウ 「お前がチーフじゃ店もすぐつぶれるって。」
シンジ 「何だよ、人が親切で言っていりゃあ...。」
- S E (カシャーんとグラスの割れる音。)
ユミ 「やめて、こんなところで。」
ケン 「ちょっと、先輩呑みすぎっすよ。(かぶせて)」
タクロウ 「なぐれよ、なぐれよ、おら、なぐれよー、ちくしょー...。」
シンジ 「コノヤロー！」(掴み合い、殴り合い - F / O)

渋谷駅近辺。東横線のガード下。

タクロウ、一人よろけながら歩いている。

N その夜も更けて、おれは独りガード下をよろよろ歩いていた。殴り合いの喧嘩なんて何年ぶりだろう。頬が焼けるようだった。

タクロウ 「痛え...。」

N シンジへの八つ当たりだというのは自分でもわかっていた。上に上げれず安月給にへこんでるのは、この俺だ。店をやめてまで留学する勇気のないのは、この俺なんだ。

S E (- 人々の行き交う音。電車微かに)

N その時俺は教会で聞いた牧師さんの言葉を思い出していた。

牧師 「(回想) イエス・キリストは、自分の話を聞くために集まった多くの人々を、まるで「羊飼いのいない羊のよう」に思われたのです。正しい道を知らずさまよっている弱い羊、それは現在の私たち人間の姿でもあるのです...。」

モノ 「迷える羊？ そうだ、それこそ俺だ。俺自身なんだ...。」

S E (踏み切りの遮断機がカンカンカン...とおりの音)

N すっかり酔いが覚めた体に、木枯らしがやけに寒い。おれは、都会の荒れ野

に放り出された羊のように、その夜、無性に惨めで、寂しかった。

モンペール工場

ケン 「あれからタクロウ先輩おかしいっすね。元気ないし。」

ユミ 「シンジのことがショックだったのよ。」

ケン 「もうクリスマスだってのに、困るよなあ。」

タクロウ、メレンゲを泡立てている。

高橋 「タクロウ、何やってる。」

タクロウ 「え？」

高橋 「何だ、これは。こんなのがメレンゲといえるか。」

タクロウ 「すみません。」

高橋 「作り直し。」

N 結局その日は、満足のいく仕事ができなかった。

冬の昼下がりに。

公園でタクロウ、ブランコに揺られている。

N 翌日、店が忙しいのはわかっていたが、どうしても仕事をする気になれなくて、無理に休みをもらった。だが、いくあてがない。なんとなく、俺の足は牧子さんが勤めている幼稚園の近くの公園に向いていた。裸のイチョウの木が寒そうに立っていた。

牧子 「タクロウさん。」

タクロウ 「あっ。」

N 見ると牧子さんが明るい笑顔で立っている。しまった、こんなしょぼくれているときに、会いたくなかったのに。

牧子 「どうしたの？お休みですか？」

タクロウ 「え、まあ...。」

牧子 「私も。病気で休んでた先生がやっと出てきたんで、今日は久々の骨休めなの。」

N 牧子さんは隣のブランコに腰を降ろすと一緒にこぎだした。

牧子 「遅くに起きて洗濯して、掃除してたらこんな時間でしょ。今から買い物もなんだから、近所にお散歩に来たの。タクロウさんも？」

タクロウ 「そんなとこ。」

牧子 「あっ、うちのバスよ。」

N 公園の脇を幼稚園のバスが走っている。窓を開けて園児たちが叫んでいた。

子供たち 「牧子せんせいー。」「せんせいーい。」「さようならー。」

牧子 「さよーならー、明日ねー。」(見送って)

タクロウ 「可愛いな。」

牧子 「でしょ？先生、先生って、なんか自分の子供のように思えてくる。」

タクロウ 「(微笑んで)いいな。子供は。」

牧子 「あの子たちは自分の弱さを知ってるんです。だから私たちに頼るし、甘えるの。大人になると、私たちは自分が本当に弱い事を忘れてしまう。みんな本当は迷っているのに、気がつく人は少ないんじゃないかな。」

タクロウ 「...そうかも。」

牧子 「だから、私たち大人も、自分が羊のように弱い事を知ったら、素直に羊飼いであるイエス様に頼ることが、必要なんだと思う。」

タクロウ 「頼る、か...。」

牧子 「あ、私いいもの持ってたんです。どうぞ。ちょっと冷めちゃったかな？」

N 牧子さんがバックから取り出したのは、大判焼きだった。まだほんのり温かだった。

牧子 「大判焼きはやっぱアンコが一番。」

タクロウ 「うまい。」

牧子 「あ、これ商売ガタキ？」

タクロウ 「いや、俺好物。甘いモンなら何でも、基本的に。」

牧子 「よかった。」

N それから俺は牧子さんの寮まで送っていった。帰り道、二人でいろんなことを話した。

牧子 「タクロウさん、26日の礼拝いらしてくださいませんか？」

タクロウ 「一応...。」
牧子 「午後に教会の有志でお茶会しようって。その時ね、憧れの「モン・パール」のケーキ食べようってことになったんですよ。」
タクロウ 「あれ、でもクリスマス、過ぎてるじゃないですか？」
牧子 「(笑)クリスマスは私たちクリスチャンにとって本当にうれしい日だけど、その日だけお祝いするわけじゃないの。私たちの羊飼いのイエス様がこの世に生まれて下さったってことは、いつでも私たちと一緒にいて下さるってこと。だから、いつだって喜びなの。25日だって26日だって、毎日がね。」
タクロウ 「ふーん、そういうもの？」

N おれは、マジに驚いて牧子さんの顔をながめた。この人の、何とも言えないマブしさの秘密は、ひょっとしてここにあるのかも知れない。

牧子 「ツリーやケーキやプレゼントも、なくてもいいのよ。あっ、でも。」
タクロウ 「何？」
牧子 「ケーキは毎日でもあった方がいいかな。だって言ったでしょ、ほら、私も甘いもの大好きだから。」
二人 (笑い)

N その日は12月も半ばを過ぎて、風も強かったが、ちっとも寒くなかった。あのシンジとケンカした夜とは、エライ違いだった。

クリスマスのモン・パール店内。にぎやかなBGM

N いよいよ今日はクリスマス。一番のかき入れどきだ。

リカ 「いらっしやいませ。」
ユミ 「こちらのデコレーションは甘さを押さえてございます。」
リカ 「イチゴショートと、フルーツムースでございますね？」
ユミ 「ありがとうございました。いらっしやいませっ。」

N クリスマスケーキを求める客でごった返している店の奥の工場は、さながら戦場のようだった。

タクロウ 「シュトーレンあがりましたっ。」
高橋 「おい、スポンジ回してっ。」

ケン 「ちょっとどいて、どいてー。」

N 嵐のような一日が終わって店を後にした時は、もう11時を回っていた。夕方から急に冷え込み、外は雪になっていた。

深夜。

タクロウ、ケン、ユミ歩いている。

ケン 「はー、今年のクリスマスも終わったー。」

ユミ 「私たちには『クルシミマス』ね。明日の休み、何しようっかな。」

ケン 「先輩、あしたの日曜は？」

タクロウ 「教会の礼拝に行く・・・予定だ。起きられたらな。」

ケン 「教会？...だって、クリスマス終わったんスよ。」

タクロウ 「別に教会って、クリスマスだけじゃないだろ。」

牧子 (回想)「...私の羊飼いのイエス様がこの世にお生まれになったんだから、毎日が喜びなの...。」

モノ 「この大都会で、俺も迷える一匹の羊、それも人一倍、弱くてどうしようもない小羊だ。すると、クリスマスに生まれたイエス・キリストは、俺の羊飼いか。だったら、今日はおれの、・・・小羊のクリスマスだな。」

N 空からは鳥の羽のように雪が舞い落ちてくる。おれの体は冷え切っていたが、心はなぜか温かくなっていくのを感じた。

モノ 「あしたは、絶対教会に行こう・・・」

N 牧子さんのこぼれるような笑顔を思い出しながら、おれはそうつぶやいていた。

<完>